

TEA と質的探究学会

第 1 回大会抄録集

日時：2022 年 10 月 1 日-2 日

場所：10 月 1 日(立命館大学大阪いばらきキャンパス)

10 月 2 日(オンライン)



目次・プログラム

ご挨拶	2
対面会場へのアクセス.....	3
オンライン会場へのアクセス.....	4
発表者の方へ	5
抄録集.....	6
1 日目@立命館大学	
12 : 00-14 : 00 対面ポスター発表	6
14 : 15-15 : 15 大会記念講演：ヴァルシナー講演.....	11
15 : 30-17 : 30 対面講習会	13
2 日目@オンライン	
10 : 00-11 : 00 オンラインポスター発表	15
11 : 00-12 : 00 オンライン総会（資料は会員に別途送付）	
12 : 00-14 : 00 オンライン会員企画シンポジウム.....	17
14 : 10-16 : 40 オンラインコメントセッション	19

ご挨拶

いよいよ「TEAと質的探究学会 第1回大会」の幕開けです。TEAと質的探究学会は、複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach）を用いた諸分野における質的探究を促進するとともに、関係者間の連帯協同によってその進歩を図ることを目的に、2022年3月に設立されました。現在、TEAを用いた研究は、その発生源である心理学のみならず、保育学、社会学、社会福祉学、応用言語学、教育学、経営学など、多様な学問分野で展開されています。2022年9月12日時点で、すでに150名を超える研究者、実践者の方々にご入会頂いており、TEAに関する関心の高さを再確認することができました。

この年次大会は、様々な専門性を有する研究者、実践者が同じ場所に集い、自身の研究を発信し、相互に対話する貴重な機会です。それぞれの専門は違っていても、共通の研究方法論を基軸にして参加者同士が議論するような年次大会は、数ある学会の中でも特徴的なのではないのでしょうか。みなさんにとっても、この大会でしか顔を合わせることのない研究者、実践者との対話は、他学会の大会とは異なる有意義な時間となるはずです。

早速、第1回大会プログラムの概要をご紹介します。同大会は、対面とオンライン、それぞれの良さを重視して開催します。10月1日（土）は、立命館大学大阪いばらきキャンパスでの対面開催です。（1）対面ポスター発表、（2）ヤーン・ヴァルシナー（Jaan Valsiner）先生（Aalborg University, Denmark）をお迎えしての大会記念講演、（3）講習会／ワークショップをそれぞれ開催します。10月2日（日）は、オンライン開催です。（1）オンラインポスター発表、（2）オンライン（会員企画）シンポ、（3）オンラインコメントセッションを開催します。同大会は、これからTEAを用いた研究を始めたい方、これまでの研究をより発展させたい方、研究ではなく実践にTEAを活かしてみたい方など、参加者の多様なニーズに応えることのできるような内容となっています。ご参加のみなさま、どうぞ実りある時間をお過ごし下さい。

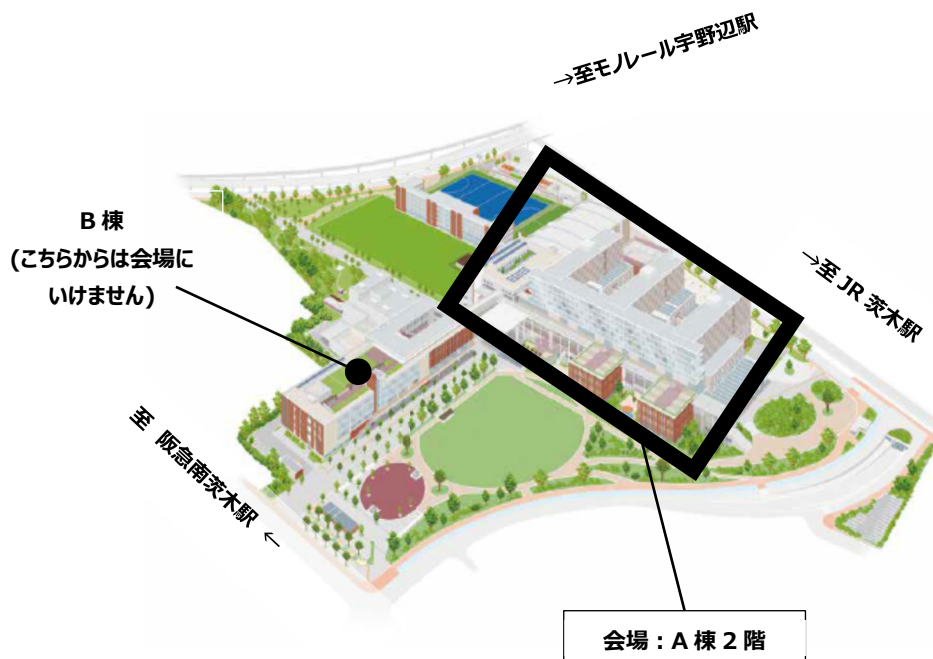
TEAと質的探究学会 第1回大会実行委員長
中坪 史典（広島大学）

対面会場へのアクセス

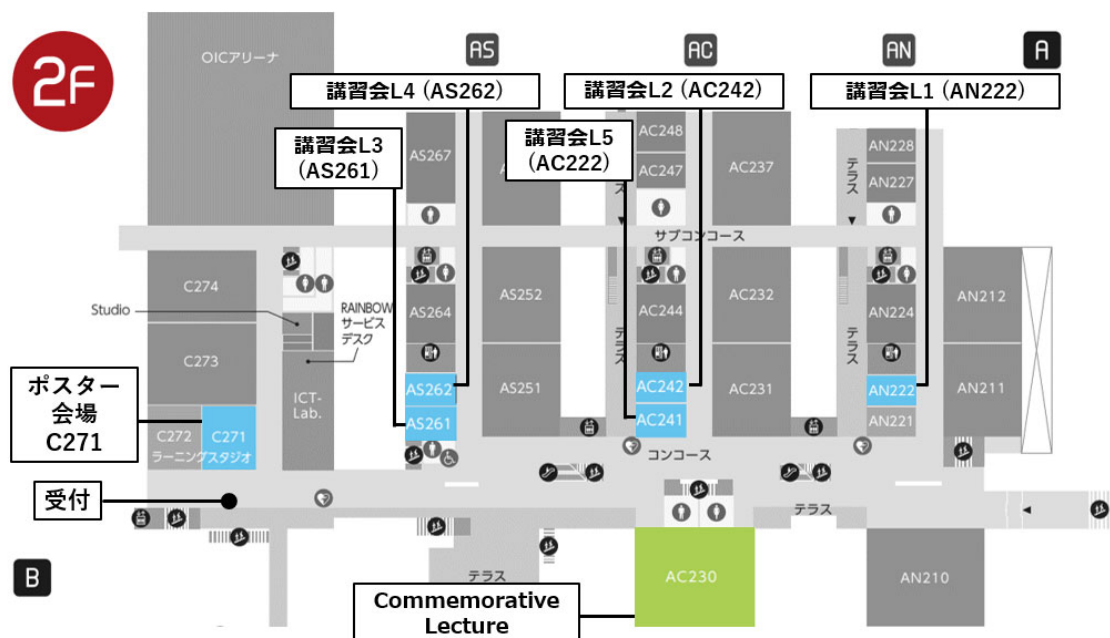
アクセスマップ：立命館大学大阪いばらきキャンパスへは、JR 茨木駅から徒歩 5 分、阪急／大阪モノレール南茨木駅から徒歩 10 分、大阪モノレール宇野辺駅徒歩 7 分などです。



キャンパスマップ：会場は、立命館大学大阪いばらきキャンパス A 棟 2F になります。（スターバックスが入っている建物とは異なります。） A 棟入り口から入り、2F に上がってください。



A 棟から入って 2F に上がり、AC271 前に受付がございました。



大会 2 日目の全プログラムは、Zoom 上で開催します。また大会 1 日目の大会記念講演（Commemorative Lecture）は Zoom でもご覧いただけます。参加するための URL は、大会ウェブサイトの支払い完了者用のページに掲出します。

大会ウェブサイトの支払い完了者用のページに入るには、ID とパスワードが必要です。これらの ID とパスワードは、大会 3 日前、前日に、Peatix システムからご登録いただいたメールアドレス宛にお送りします。また、大会当日 9 時以降には、Peatix の個人ページからご覧いただけます。

Zoom にログインした際、Zoom 上に表示される名前は、大会参加時に登録した名前と所属にしてください。

大会は、オンラインポスター発表、およびオンライン会員企画シンポジウムは、Zoom のブレイクアウトルームで開催されます。参加者は自由にルーム間を移動できるように設定されていますので、自由にルームを移動して、質疑に参加してください。

大会当日、オンラインでの参加用に一部屋開放します(WiFi もご用意します)。詳細は、1 日目に大会受付にご相談下さい。

発表者の方へ

対面ポスターセッションで発表の方へ

ポスター会場の壁面に掲出いただきます。最大サイズは A0（841 × 1189mm）です。設置用の磁石等は大会の方でご用意します。責任在籍時間は特に指定ませんが、発表時間中はできるだけご自身のポスターが見える位置にしておくようにしてください。

オンラインセッションで発表の方へ、

いずれのセッションも開始の 10 分前には参加できるようにしますので、発表者は、画面共有やカメラ、音声等を事前に確認するようにしてください。

オンラインポスターセッション、オンライン会員企画シンポジウムは、Zoom のブレイクアウトセッションで行います。自分の発表番号のルームで待機し、参加者に対して説明と質疑を行ってください。

抄録集：対面ポスター発表（10月1日12:00-14:00）（会場：C271）

対 P1 配慮の必要な保護者に対する保育士の支援プロセス

上田敏丈（名古屋市立大学大学院人間文化研究科）

保育士は子どもとの関わりを重要と考え職業選択をしている。しかしながら、実際に離職の理由としては、保護者対応を含めた人間関係によることが多い（赤塚・祢宜,2020）。そこで、保育士へのインタビュー調査を通して、配慮の必要な保護者への支援プロセスを複線径路・等至性アプローチ（安田・サトウ 2017）によって可視化することで、支援に必要な特徴を明確にする。インタビューは、2022 年 2 月～2022 年 4 月までで、9 名の保育士に実施した。その結果、支援のプロセスは「はじまり」「認識のずれ」「長期化」の 3 期にわけられた。配慮の必要な保護者への支援は、適切に行わなければ「ワン・ケース・クライシス」となり、離職や休職へのつながるため、行政や専門職の支援が求められる。

対 P2 双方向 TEA による不登校経験家族の自己システムと家族システムの変容プロセス

豊田香（拓殖大学別科）・卒田卓也（近畿大学心理臨床・教育相談センター）

本研究は、不登校経験家族の各成員（子・母親・父親）のナラティブに寄り添い、それぞれの自己システムの変容と家族システムの変容を可視化し、それらをシステム論から検討したものである。可視化するにあたり、従来までの TEA（Trajectory Equifinality Approach）を応用し、双方向 TEA という新しい質的研究法を開発した。分析の結果、3 者は時間と空間を移動しつつ、不登校を取り込んだ新たな日常を定着させるような自己システムへと発達させた。そのカギは〈家族でいる〉という家族に対する信念を、3 者間で共有できたことであり、これにより家族システムが回復方向に作動できたと考える。不登校からの回復に至るプロセスには、6 つの時期区分（第 1 期：異物としての不登校未満、第 2 期：排除したいができない不登校、第 3 期：扱わない不登校、第 4 期：不登校の恩恵、第 5 期：不登校の意味づけ、第 6 期：不登校を取り込んだ日常）が確認できた。自己システムも家族システムも、発達の前に〈最小安定〉のフィードバックのない時間が起きることが示唆された。

対 P3 日本のホスピタリティ産業における外国人材の異文化適応とキャリア形成の様相 – 複線径路等至性モデリングを用いた分析から

宮城貴子（立命館大学大学院人間科学研究科）

日本のホスピタリティ産業における外国人材は日本文化・社会に異文化適応する必要があると同時に、生活のためにキャリアを形成する。そのため、異文化適応と当該産業におけるキャリア形成のプロセスを同時に考察することが重要である。外国人材の多様な人生の歩みを見るために、当該産業に従事する 4 名へ半構造化インタビューを実施し、その語りを複線径路等至性モデリングで分析した。その結果、4 名の異文化適応の様相は、日本に生きる外国人材としてのアイデンティティを

認め、その違いを良いものだと判断できる「適応」や「統合」という段階に在るという共通点がありながら、文化の受け入れや捉え方には、差異が生まれている。そして、キャリア形成では、日本語と母語を活かす職業を選んでいること、将来の自分を家族との居住地である沖縄で描くという共通点があるが、それぞれの持つキャリアの指針には違いがあることが明らかになった。

対 P4 SPO の検討

市川章子(一橋大学大学院言語社会研究科)・小田友理恵(法政大学現代福祉学部)

・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

統合された個人的志向性 (Synthesized Personal Orientation : SPO) は、複線径路等至性アプローチ (TEA) における研究者が研究対象者の個人の内的志向性を表現する概念の一つである。個人の内的な欲求や意志を強調したい場合に用いると有効な概念である。SPO は、TEM 図で図示化される場合と図示化されない場合があり、TLMG 図で描く試みも行われている。SPO はひとが目標に向かって努力を行う力を概念化する。近年、臨床心理学、看護学や韓国学などで SPO を用いた研究も散見されるが、個人の内的な欲求や意志、図示化するの否か、その他の可能性について議論は十分であるとはいえない。本発表では、TEA を質的探究するうえで、重要な「個人の内的志向性」をキーワードに、翻訳に関わる SPO、心理的支援の臨床実践の SPO について考えたい。

対 P5 中堅看護師の職務経験プロセスにおける心理的变化とキャリア発達の様相

中本明世(甲南女子大学看護リハビリテーション学部)

本研究は、メンタルヘルスケアを含めた看護師のキャリア支援への示唆を得るために、中堅看護師の心理的变化とキャリア発達の様相を明らかにすることを目的とした。経験年数 6 年目の中堅看護師 A 氏を対象に半構造的インタビューを行い、職務経験と心理的变化について調査し、ライフライン法と TEM を用いた分析を行った。1 年目で下降し続けたメンタルは、2 年目での「先輩後輩との交流」「主体的な看護実践」が分岐点となり、メンタルが向上しやりがいを感じていた。しかし、4 年目の「病棟での役割過多」「COVID-19 の情報混乱」によりメンタルは低迷した。その後、病棟編成による「新たな看護実践」が分岐点となり、新たな看護を学ぶことでメンタルは向上し「看護の視野が広がる」という等至点に至っていた。プロセスにおいて特に支え合える人的環境は、新たな役割や課題に取り組む上でメンタルを良好に保ちながら自己成長を促す促進要因であった。

対 P6 転機における成長と展望—自己を対象とした TAE ステップと Auto-TEM による考察

今井桂子(社会構想大学院大学実務教育研究科)・伴野崇生(社会構想大学院大学実務教育研究科准教授)

本発表では、筆頭発表者自身を対象とした Auto-TEM(自己を対象とした TEM、土元 2020)による自己分析について報告を行う。筆頭発表者はこれまでに、「私自身が仕事における実務経験を通じて、どのように成長したか」を Thinking At the Edge (TAE) ステップによってリフレクションを

行なった経験がある。TAE による分析・リフレクションの結果、「関心を寄せたものへの想像力が世界を広げ、責任を持って洞察すれば、人生への贈り物になる」という一行詩風のセンテンスを得ることができた。また、今後の目標として「今後は自分の能力を意識し、意図的に行為することで、自分の中に新しい秩序を構築する」というセンテンスが得られた。本発表で扱う Auto-TEM では、TAE ステップによる分析の結果得られたセンテンスに至るまでの過程や今後の展望について分析を行なう。

対 P7 タイ人技能実習生の日本語学習の学習動機付けの変容

SRIISSAREE JARASWAT(立命館大学大学院言語教育情報研究科)

本研究はタイ人の技能実習生の日本語学習に対する学習動機づけの変容について調査を行った。調査協力者は日本での実習期間中に日本語能力試験 N2 または N3 に合格し、現在も日本語学習を継続しているタイ人の元技能実習生 3 名である。協力者らに 1 人に 3 回、1 回につき 1 時間程度で実習期間中や帰国後の出来事または日本語学習の様子についてインタビューを行い、収集したデータは複線径路等至性モデリング (TEM) を用いて分析した。分析結果は Dörnyei (2005) が提唱した The L2 Motivational Self System (L2 動機づけ自己システム) を援用し、タイ人の技能実習生は来日後、日本語学習に対する学習動機付けがどのように変化したかについて考察を行った。その結果協力者らにそれぞれ時間の変化とともに様々な動機づけの変容が確認できた。

対 P8 三名の自作派コスプレイヤーへのインタビューから遊びの発達プロセスを検討する

福山末智(立命館大学大学院人間科学研究科)・隅本雅友(立命館大学 OIC 総合研究機構)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

マンガ等に登場するキャラクター達に扮して遊ぶ「コスプレ」という行為がある。コスプレは 21 世紀から一般に発展し、現代では多くの若者が楽しむ遊戯となっている。本研究では、コスプレという遊戯の多様な楽しみ方を解明し、その遊戯の方法によって異なる個体化のプロセスと共通的な要因を導き出し、遊びの発達のプロセスを明らかにする事を目指す。研究方法は、自作派コスプレイヤー 3 名に対して半構造化インタビューを 3 回行い、TEM を作成した。分析に際してはシモンドンの個体化論を援用し、コスプレに対する目的・目標が変化した時点に注目して行った。その結果、コスプレ活動を続ける中で転換期 (コスプレに対する目的・考え方が変化した期間) が 3 名に共通して現れた。これにより、遊びの発達プロセスでは、転換期が遊びを続けるかやめるかの分岐点であると考えられ、遊びを発達させる中で転換期が訪れることは必須通過点でもあるといえる。

対 P9 保護者が保育所等訪問支援を依頼するまでのプロセス —複線径路等至性モデリング (TEM)を用いて—

大村拓史(AIAI Child Care 株式会社事業開発部)

【目的】児童福祉法による保育所等訪問支援の普及が進んでいない。わが子の支援を希望する保護者に、いつ・どのような援助をすれば支援の円滑な依頼につながるのかを検討する必要がある。

【方法】実際に子どもが保育所等訪問支援を受けている四人の保護者にインタビューする。TEM と TLMG の理論をもとに、起きた事象に対して保護者が経験した行動・記号・信念のプロセスを明示する。OPP や BFP 等から保護者の円滑な依頼を抑制させる要因・促進させる要因を挙げ、時期と援助内容を導く。【結果】四者に共通した OPP から「わが子に支援が必要だと納得するまで」「わが子に必要な支援内容に気づくまで」「専門家による生活訓練をイメージするまで」の 3 つの時期が導けた。時期により保護者が求めるニーズは違うため、ニーズに合った相談援助が必要である。また、相談援助の際には保育士・相談員・支援員といった領域の違う専門職の連携が必要である。

対 P10 大学教員の授業活動におけるストレスの変容過程 –授業内容による違いについての検討–

片岡恋惟(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院)

不安や悩みを扱うストレス研究において、大学教員を対象とした研究はほとんど行われていない。たとえある程度の教育経験を積んでいたとしても、一人で複数の授業を担当しなければならない、あるいは自身の専門とは異なる内容の授業を担当しなければならない場合もあり、教員はそれぞれの状況・環境により独自の不安や悩みを抱えている。教員の健康を保ち、必要な支援について考えるためには、ストレスの要因、対処行動、変容の有無を含むストレス過程について明らかにする必要がある。本研究では、大学教員の授業活動におけるストレス過程解明の一環として、内容の異なる複数の授業を担当している教員を対象にインタビュー調査を行い、TEA（複線径路等至性アプローチ）を用いて分析を行った。分析の結果、ストレス過程には授業内容により異なる部分と共通の部分があること、いずれの授業においても社会的・歴史的な影響を受けていることなどが明らかとなった。

対 P11 写真から子どもの心情を読み取るプロセス

香曾我部琢（宮城教育大学教育学部）

保育者が環境構成したり、声がけなどの援助をしたりするとき、常に即時的に子どもの感情や思いを読み、その子どもへの理解をもとにそれらを実行する。本研究では、一瞬で判断することが求められるこの子どもへの理解を、保育者がどのように思考するのか、そのプロセスを明らかにする。また、併せて、そのプロセスにおける前頭前野領域脳血流動態についても示すことで、子ども理解における保育者の感情や思考の特性について総合的に検討を行う。

対 P12 男子大学生の生理に対する理解-会話分析・発生の三層モデルによる検討

門田菜々（立命館大学総合心理学部）・土元哲平(日本学術振興会・大阪大学人文学研究科)・サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

本発表では、生理という身体現象についての「生理がない人（主に男性）」の理解を明らかにすることを目的とする。方法には会話分析を用い、さらに結果の理解を促進するため TLMG での分析を

おこなった。対象者は親密な友人関係にある男子大学生 3 名であり、「生理」をテーマとする会話を行わせ、その会話録音をもとにトランスクリプトを作成した。内容を踏まえ 6 つの断片に分類したところ、断片 1～2 は TLMG における行為レベル、断片 3～4 は記号レベル、断片 5 は価値レベル、そして断片 6 は全てのレベルを縦断していることがわかった。また男性も女性とは異なる方法（エスノメソッド）でパートナーとの経験を踏まえ、生理がタブーであるという社会的な規範を内化していることがわかった。よって本発表で用いた方法は、言語化の困難さが存在していたり、そのことが社会問題を引き起こしたりするそのほかのタブー研究にも有用であると考えられる。

対 P13 TEM MODEL AND GERMAN RESEARCH ON WOMEN'S SELF-NEGOTIATION OF PERCEIVED NORMATIVITY IN A WESTERN SOCIETY

Rebecca Menhart (Sigmund Freud PrivatUniversität-Berlin)

In terms of the question of beauty, body and normativity, this study addresses norms of physical appearance and the associated perception of "tall" women. Disadvantages due to divergent societal concepts about body shapes and a non-normative appearance are still a reality today. In this paper, I will specifically address the normativity of body height. How do women in the Western society experience "being tall"? Not only will socially prevailing norms be addressed, but above all, the question of one's own perception will be illuminated. Similarly, the focus of this paper will be on the very personal negotiation that every woman has with her own body height. To this purpose, an interview was conducted with a mother who speaks about these societal influences from her pregnancy to her current life situation, providing a broad perspective on life. The data was analyzed through the lens of the Trajectory Equifinality Model (TEM) to describe the life paths she has taken and to make visible the other, unchosen options open to her. From the research, it emerged that Societal Dominance (such as, gender stereotypes - the woman should be smaller than the man) is a key societal factor influencing how the woman feels about her body height. Similarly, it became clear that Societal Guidance is often based on a counter narrative. Say, you're a tall woman, then you can be a model (while catering to a different underlying beauty standard).

(対 P13 は、大会 2 日目オンラインポスター発表に変更となりました。9/25)

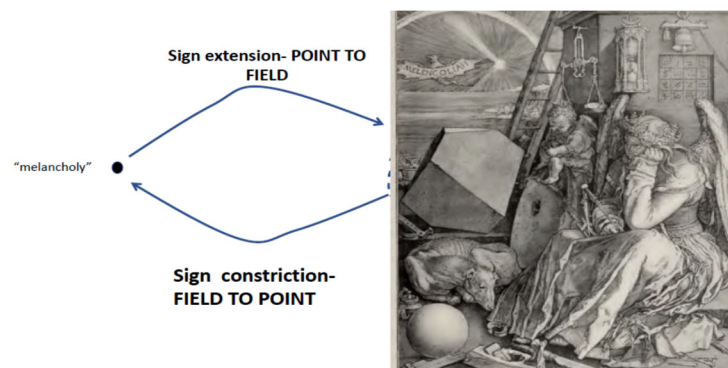
抄録集 : Commemorative Lecture (10月1日 14:15-15:15)

(会場 : AC230&Zoom)

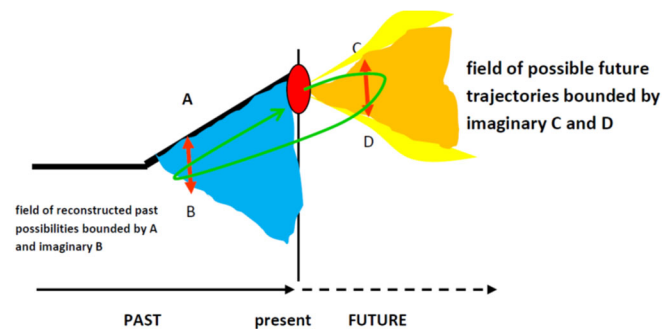
IMAGINATIVE AGENCY: HOW *TEA* MATTERS

Jaan Valsiner (Aalborg University and Federal University of Bahia)

The contemporary semiotic turn in psychology makes the construction and use of field-like signs central for the functioning of the human psyche. More precisely it is the constant ***dynamics of meaning making*** between field-like and point-like signs—***extension*** (of point into field) and ***constriction*** (field into point):



The constant extension-constriction process makes the primacy of imagination by the meaning-maker crucial for linking the past ($A \leftrightarrow B$ in TEA scheme) with the future ($C \leftrightarrow D$);



The process of negotiating the relation with the past ($A \leftrightarrow B$) and future ($C \leftrightarrow D$) happens in TEA on the border (red circle in Figure). That process entails constant move between the imagined certainty (point like sign) with field-like uncertainty.

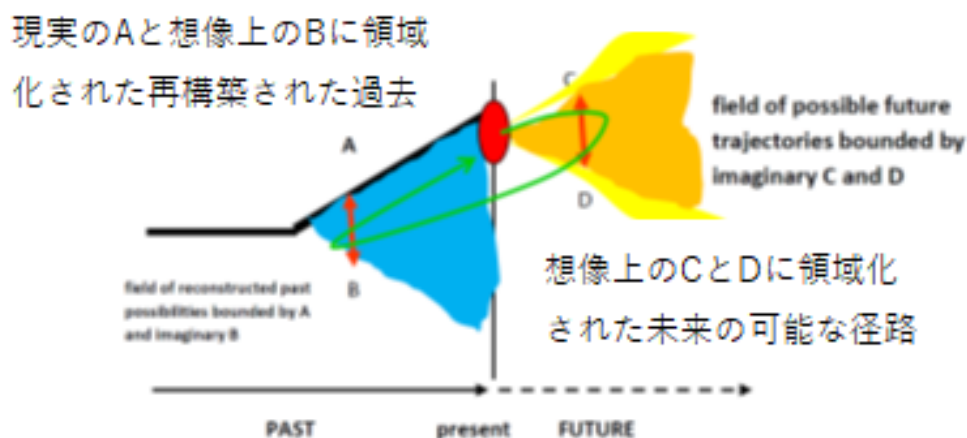
講演の要約 (Japanese)

想像するエイジェンシー：TEA がいかに重要か

心理学における現代の記号論的転回、域的記号 (field-like signs) の構築と使用を、人間の精神の機能にとって中心的なものに据える。より正確には、域的記号と点的記号の間の意味生成の絶え間ないダイナミクス、すなわち (点的から域的への) 拡張と (域的から点的への) 収縮である。この絶え間ない拡張と収縮のプロセスは、過去 (TEA スキームのAとBの対立) と未来 (CとDの対立) を結びつけるために、意味形成者 (meaning-maker) の想像力／構成力の優位性を決定的にする。



TEA では、過去 ($A < > B$) と未来 ($C < > D$) の関係を交渉するプロセスが境界線上で起こる (図中の赤丸)。そのプロセスは、想像上の確実性 (点的記号) の間を、域的な不確実性と共に絶えず移動することを、必然的に伴っている。



抄録集：対面講習会（10月1日15：30-17：30）

L1 保育実践と TEA：子ども理解のツールとして（会場：AN222）

講師：渡邊真帆（福山市立大学）・中坪史典（広島大学）

質的研究法としての TEA は、研究者の研究方法のみならず、保育者が子どもを理解し、自らの実践を振り返るための方法としても位置づけることができる。質的研究法としての TEA は、インタビューデータの分析のみならず、観察データや映像データを分析するための方法としても位置づけることができる。この講習会では、子どもの活動は、一言では説明できないほど豊かな経験のプロセスがあるという前提のもと、実践者が TEM 図の描出を通して子どもを理解し、自らの実践を振り返るためのツールとしての TEA の可能性について検討する。具体的には、映像データをもとに、対象となる子どもの行為や発話、周囲の出来事などのラベルを生成し、時系列に配列しながら等至点（EFP）を設定することで、その子の活動に影響を与えていると考えられる様々な周囲の出来事について検討する。また、TEA の特徴である多様な径路の描出を活かして、「もし、ここで保育者や他児がかかわったら（かかわらなかった）」「もし、ここでこの出来事が起こったら（起こらなかった）」など、「実現したこと」「しなかったこと」の結節点となる分岐点（BFP）について保育者同士で推理しあい、語り合うような、TEA を活用した研修のあり方を提案する。

L2 看護実践と TEA：対象者理解・看護職理解のツールとして（会場：AC242）

企画：大川聡子（関西医科大学）

講師：中本明世（甲南女子大学）・大野志保（大阪公立大学）・小路浩子（神戸女子大学）・伊東美智子（神戸常盤大学）・田中千尋（帝京大学）・横山直子（立命館大学）
看護実践や看護教育、そして看護師としての成長など、TEA（複線径路等至性アプローチ）が看護領域に与えた影響は小さくない。この企画では、TEA を看護領域で実践している方／したい方々が集う場所を提供することを一つの目的としている。TEA が発表された直後に看護領域に取り入れた研究者たちは、どのような目的でそれを取り入れようとしたのか、そして、どのような苦労があったのか。他の質的研究とどのような異同があるのか。そんなことを中心に参加者それぞれの問題意識を共有していきたい。コロナ禍において看護職の移動が制限されている状況であり、企画／担当者の全員がこの場に揃えるわけではないが、看護領域で TEA に関心をもつもの同士で TEA の活用方法や情報交換を行いたいと思っている。参加者がそれぞれの看護実践と TEA の関係をより濃密にできるようにお互いがサポートしあえるようなアリーナを作っていきましょう。もちろん、看護領域以外の方の参加も歓迎です。

L3 TEA（複線径路等至性アプローチ）のいろは（会場：AS261）

講師：安田裕子（立命館大学）

TEA は、文化心理学に依拠し等至性（Equifinality）の概念をもとに発展した。文化的存在である人の発達や人生径路を描出する方法「複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：TEM）」を中心に、ある有り様（等至点）を経験した人を研究対象に選定する理論「歴史的構造化ご招待（Historically Structured Inviting：HSI）」、分岐点での自己の変容・維持過程を可視化する理論「発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis：TLMG）」によって構成される。TEM は、人の経験や現場で生起する事象の時間的変容を、埋め込まれた社会的・文化的諸力を可視化しつつとらえる分析技法であり、特有の概念装置が存在する。これら概念の理解を進めることで、基本的な TEM 分析をすることができる。この講習会では初学者向けであり、TEM の基本的理解を理論と実践により進めていく。TEM では、トランスビューといって、インタビュアー-インタビュー双方の視点を融合しつつ、過去-現在-未来の時間軸のなかで経験を捉えていくが、そのプロセスを経験的に学ぶ。

L4 TEA（複線径路等至性アプローチ）の理論的進展（会場：AS262）

講師：サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

TEA（複線径路等至性アプローチ）は、分岐点と等至点とその複線経路が最小のユニットであるが、近隣諸科学の様々な概念を取り入れて発展してきた。初期の概念としては必須通過点（OPP）があげられる。この講習会では、ジットウンのイマジネーション（ももいろクローバー分析）、シモンドンの展結・個体化、松村の関係学、ガーフィンケルのエスノメソドロジーなど、最近取り入れられつつある諸概念について紹介し、それが TEA（複線径路等至性アプローチ）のどのような側面に影響を与えるのかについて検討していきたい。今回は特に、関係学の関係構造と TEA のマリアーヂュの可能性を追求したいと思っている。自ら新たな理論的展開を志向する方による革新的なアイデアの披露も歓迎したい。

L5 Post-lecture Event／ヤーンとおしゃべりしよう！（会場：AC241）

Talking with Prof. Jaan Valsiner on TEA with tea.

Jaan Valsiner（Aalborg University）・Teppei Tsuchimoto(JSPS/Osaka University)
Let's talk with Prof. Valsiner, a leading expert in cultural psychology. Whether it is about the content of the commemorative lecture or your own research, anything is allowed. Don't be put off if your English isn't good enough!

Someone will translate for you! Let's talk with Jaan on TEA with tea!

ヤーンとしゃべろう！文化心理学の第一人者、Valsiner 教授とおしゃべり／議論しましょう。記念講演の内容のことでも、自分の研究のことでも、何でもいいです。英語が不得意であっても気おくれせず参加してください！誰かが通訳しますよ！お茶を飲みながら TEA についてヤーンと語りましょう！

抄録集：オンラインポスター発表(10月2日10:00-11:00)

OP1 保育者における自律的な感情労働の自覚が保護者支援に及ぼす影響

森本紗貴子(愛知県清須市須ヶ口保育園)・木村達志(桜花学園大学保育学部)

本研究では、保育者の自律的な感情労働は保護者支援に好影響を与える、という仮説を立てた。研究対象は、公立保育園の保育士で勤続8年以上、且つ育児経験がある4名とした。対象者へ3回の介入を行った。1回目は、大学教員による「保育者のキャリア発達と感情労働」という講義を受講した。2回目は、「感情労働から保育者の専門性を考える」というテーマでグループワークを行った。3回目は、対象者が自身の保護者支援場面におけるエピソードを話し、対象者が自律性を伴う感情労働をしていると思われる場面を研究者が抽出し、それを指摘した。3回の半構造化インタビューを行い、複線径路等至性モデルを用いて逐語録を分析した。分析結果から、保護者支援に対する意識の変容をTEM図で描出することにより、3回の介入が保護者支援を全うするため段階的にポジティブな影響を与えていたのではないかと考えられた。

OP2 中国人大学生の日本語学習動機の変容と進路決定プロセス

稲田栄一(立命館アジア太平洋大学言語教育センター)

本研究は、日本語学習者の大学院進学に至るまでの学習動機の変容過程と、その要因を明らかにしようとする試みである。調査の目的は、日本語学習者の学習動機の変化要因を教室内における文脈のみで捉えるのではなく、外界における経験も含めて包括的に理解することである。そのために、日中の各大学で約2年間ずつ日本語を学習した中国人留学生に半構造化インタビューを行い、複線径路等至性アプローチおよび自己決定理論により分析した。対象者は、学習の過程で日本語能力向上や日本語能力試験N1合格等の成果が得られたことで、従来描いていた日本語教師になるという「漠然とした夢」を「実現すべき目標」として捉え直し、大学院進学という等至点に向かうことになった。その歩みを後押しした力は、重要な他者から受けた教室外での支援や自己成長が認識できる学習環境などであり、そこから得られた動機づけの高まりが進路決定に深く関わっていることがわかった。

OP3 人工内耳埋め込み手術の意思決定に至る過程

勝谷紀子(東京大学先端科学技術研究センター・日本福祉大学大学院)

人工内耳とは補聴器を装用しても効果が十分で得られない人に対してなされる聴覚獲得法である(日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会ウェブサイトより)。人工内耳埋め込み手術を受けるかの意思決定にはさまざまな要因が関与する。本報告は、人工内耳を装用している報告者自身がインターネット上に記述した人工内耳埋め込み手術までの記録を対象にTEAで分析した。難聴の診断を受けるという必須通過点から人工内耳埋め込み手術を受けるという等至点(両極化した等至点は同手術を受けない)までの経路をみると、難聴の診断を受けて補聴器を装用する時期は人工内

耳適用基準を満たさない聴力、視覚的情報で対処できる環境などが社会的方向づけとして働いた。次第に補聴器の効果の乏しさ、他者からの聴力低下の指摘、業務でのコミュニケーション困難、生活の質の低下などが社会的助勢となり、医師の助言や人工内耳装用者の接触も重なり人工内耳埋め込み手術へと至った。

OP4 TEA の初学から論文採録に至るまでのプロセス：研究者自身の事例をもとに

小山多三代(東京外国語大学大学院総合国際学研究科)

本発表では、筆者がどのように TEA を学んで研究を進め、論文採録に至ったのかを共有することを目的とする。筆者は、毎月定例で行われる「TEA 研究報告会（TEA サロン）」の運営や、ワークショップでの指南に携わる中で、参加者から TEA に関する様々な質問を受けるようになった。その中でも特に、どのようにして TEA への理解を深め、論文を執筆したのかという点や、データ採取および分析にあたっての留意点等について関心が寄せられていることがわかった。そこで、本発表では、自身の事例をもとに、TEA の初学から論文採録に至るまでのプロセスを示し、特に重要なポイントに焦点を当て、発表を行う。これにより、TEA の初学者に対して、研究を進める上での手掛かりを示すだけでなく、TEA を用いる学生の指導者に対しても、どのような教育的介入が求められるかを考える糸口を提供し、TEA のさらなる裾野の拡大に寄与できれば幸いである。

OP5 Psychoendoprosthetic: Exploring the challenges and meaning making mechanisms of patients with a septic implant

Vincent Krenn(Sigmund Freud Privat University Vienna)

Periprosthetic joint infections (PJI) place an immense burden on the patients and their social environment. Whilst clinical consequences (pain, prolonged hospital stay, unclear treatment outcomes, immobility, multiple surgeries) are well documented, psychosocial interventions have not yet been employed to the field of septic surgery. Since little is known about the patients' point of view, a case study according to a semi-structured interview of a patient with a chronic PJI was conducted. Through the application of the Trajectory equifinality model it was possible to grasp the transient moments of meaning making, which produced pivotal insights into the coping mechanisms and general needs of septic patients. Therefore, this idiographic study provides initial hallmarks for future patient care and psycho-social intervention based medicine.

OP6 TEM MODEL AND GERMAN RESEARCH ON WOMEN'S SELF-NEGOTIATION OF PERCEIVED NORMATIVITY IN A WESTERN SOCIETY

Rebecca Menhart (Sigmund Freud PrivatUniversität-Berlin)

(P10 の対 P13 をご覧下さい)

抄録集：オンライン会員企画シンポジウム（10月2日 12:00-14:00）

S1 オートエスノグラフィーと TEA の対話的融合：文化と人間発達を理解するために

企画・話題提供：土元哲平(日本学術振興会・大阪大学人文学研究科)

司会：大河内瞳(大阪樟蔭女子大学学芸学部)

話題提供：市川章子(一橋大学大学院言語社会研究科)

話題提供：勝谷紀子(東京大学先端科学技術研究センター当事者研究分野)

話題提供：福山未智(立命館大学大学院人間科学研究科)

話題提供：岡崎享恭(近畿大学国際学部・大阪公立大学大学院現代システム科学研究科)

話題提供：辻高秀(立命館大学大学院人間科学研究科)

指定討論：小澤伊久美(国際基督教大学教養学部)

オートエスノグラフィー（autoethnography; AE）は、研究者が（時には他者と共に）個人的経験を語ることを通して、自身が関与してきた文化や社会を理解していくためのアプローチである。

AE は、個人のナノ心理学的な「深い経験づけ（deep experiencing）」を探求するとともに、そのプロセスに関与した個人的文化 < > 集合的文化の関係について考察していくという点で、文化心理学の方法として重要である。近年、TEA（TEM）を AE の方法として活用した研究も散見されるが、両者をむすびつけることについての意義は十分に検討されていない。そこで、本シンポジウムでは、文化心理学にとって重要な「文化と人間発達」をキーワードに、AE と TEA それぞれの独自性を保ちながら、両者を対話的に融合するための可能性について考えたい。

S2 TEM と TLMG を融合させる分析手法の考察

司会・企画・話題提供：豊田香（拓殖大学別科）

企画・話題提供：上田敏丈（名古屋市立大学大学院人間文化研究科）

本シンポジウムでは、TEA の分析枠組みのうち特に TEM と TLMG の接点に着目し、TLMG を取り込んだ分析結果を記述する手法について検討・考察する。具体的には、『TEA による対人援助プロセスと分岐の記述 保育，看護，臨床，障害分野の実践的研究』（安田裕子・サトウタツヤ 編著，2022 年，誠信書房）の 4 章「TLMG（発生の三層モデル）—価値と行為を媒介する記号の働きに着目する」を読み解き、そこで紹介されている TEM と TLMG を融合させた 2 つの記述や手法（上田バージョン（図 4-6）と豊田バージョン（図 4-5））をそれぞれ作成者である話題提供者が解説する。これらの結果図に至る分析上の手続きや工夫点や特徴、またその背景にある考え方や焦点化の仕方などを参加者と共有し、これらの図を発展・応用させる方法などについて、一緒に考えてみたい。TLMG が難しいと思う、また挑戦したいと思う TLMG の初学者との質疑応答の時間を十分にとる双方向シンポジウム形式とするので、積極的な参加者の質問や意見等を歓迎する。

S3 データをどのように TEM 図に描き出すか——日本語教育分野に関わる研究者と研究参加者の関係性に注目して

企画責任者・企画趣旨・司会：上川多恵子(立命館大学大学院 人間科学研究科)

話題提供 1：東田明希子（創価大学 日本語・日本文化教育センター）

話題提供 2：水島亜美（創価大学 日本語・日本文化教育センター）

話題提供 3：小山多三代（東京外国語大学大学院 総合国際学研究科）

話題提供 4：高井かおり（立命館大学大学院 人間科学研究科／明星大学 人文学部 国際コミュニケーション学科）

指定討論：宮下太陽（立命館大学大学院 人間科学研究科／株式会社日本総合研究所）

本シンポジウムでは日本語教育分野で研究を進める 4 名の話題提供者が発表を行う。日本語教育分野に関わる TEA を用いた研究では、自己や他教員を対象とした日本語教師のキャリア形成に関わる研究や、日本語を母語としない学習者や外国人材を対象とした研究が見られる。本シンポジウムでは、研究者と研究参加者の関係性、つまり研究者と「歴史のご構造化招待(HSI)」との関わりについて考えるとともに、質的データの扱い方（図での描き方）に対する率直な疑問や悩みをフロアの皆様と共有し、今後の TEA 研究における課題や発展について議論できる場としていきたい。また、指定討論では TEA の理論的背景から、研究者と研究参加者の関係性と質的データの扱い方について考えていきたい。なお、本シンポジウムでは研究分野を問わず TEA での質的データの扱い方や描き方も含めて議論するため、さまざまな分野の研究者の皆様にご参加いただければ幸いである。

抄録集：オンラインコメントセッション（10月2日 14：10-16：40）

OC1 精神疾患を有する大学生のリカバリープロセスと支援

鹿内佐和子(目白大学人間福祉学部)・谷口恵子(東京福祉大学心理学部)
・姜壽男(東京福祉大学社会福祉学部)

研究目的は、精神疾患を有する学生が、大学に入学して大学生活を継続していくために辿るプロセスと必要な支援を明らかにすることである。国際疾病分類第 10 版（ICD-10）の精神及び行動の障害のいずれかの診断名にて精神科に受診歴があり、かつ、大学に 1 年以上在学した経験がある 16 名の調査協力者に、2021 年 8 月～2022 年 8 月の期間、3 回ずつインタビューを行い、逐語録に起こし、TEA にて分析を行った。結果として、プロセスはいくつもの径路に分かれるが、共通点は①病状悪化や教員・家族の理解不足から不登校や通信制高校などへの転校を経て、目標を見出し、大学に入学、②入学当初は、同級生との関係性に悩み、頑張りすぎて体調を崩し、単位取得に苦労する、③自分と向き合い、努力を積み重ね、教職員の支援と同級生との交流を得て、卒業していた。大学卒業や国家資格取得は達成感と自信が得られ、その後の人生の糧となっていた。

OC2 アメリカ人が日本学研究者に至る人生の径路

ウォーカー泉（シンガポール国立大学語学教育研究センター）

日本の経済的な存在感が低下するにつれ、世界的に日本研究が停滞してきており、欧米諸国やシンガポールでは日本研究を専攻する大学院生が激減している。韓国でも、1990 年代から 2000 年代にかけて日本研究機関数が、23 機関から 5 機関となった（立命館国際地域研究 2012）。こういった日本専門家の減少は、政治や経済のパートナーを失うことにつながり、日本国益を失う（NIRA 総合研究開発機構）と警鐘が鳴らされている。そのような中、日本学を専攻し、日本の専門家をめざす海外の大学院生はどのような人生の径路をたどり、どのような動機でそこに至ったのであろうか。筆者は、アメリカの大学院に所属し、日本研究を行っている大学院生 3 名を対象に調査を行い、TEA を用いて彼らの人生の径路を探った。本発表では、その中の一名に焦点を当て、日本研究に至る人生の径路と、外国人が日本との接触を通して捉えた日本社会の光と陰について報告する。

OC3 ライフキャリアの視点から見た非常勤日本語教師のキャリア形成の多様性

佐藤綾(福井大学語学センター)・片野洋平(長岡技術科学大学工学研究科)
・高木裕子(実践女子大学人間社会学部)

本研究は日本語教師のキャリア支援のあり方の検討を目指し、キャリア形成の過程にある分岐点、キャリアの選択や継続に影響を与える要因を明らかにすることを目的としてインタビュー調査を行っており、本発表ではその一部の結果について報告する。本発表の調査対象者は、日本の大学また

は日本語学校に勤務する非常勤日本語教師 3 名で、19～31 年の経験を持つ。その 3 名に対して、半構造化インタビューを 1 名につき 2～3 回行い、その結果を分析した。「日本語教師を続けている」を EFP とし、TEM 図を統合した結果、「日本語教育能力検定試験合格」「常勤職に就く」が OPP、「常勤職をやめる」が BFP として見られた。また、キャリアの継続を支える要因には「教える楽しさ」「地元のコネクション」等が見られたが、一方で、キャリアの継続を阻害する要因には「家庭の事情」「授業準備のための時間の確保」等が見られ、さらに、「授業に専念したい」という価値観が見られた。

OC4 複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いた留学時の内面的変容に関する考察

山川健一(安田女子大学文学部)

近年、「グローバル化」に対応できる人材の育成の必要性が急速に唱えられてきた。そして、「留学」はグローバル人材の育成に貢献すると考えられ、多くの大学においても留学が教育プログラムに組み込まれている。ただし、留学は大学や学生にとって多大な労力や費用を要するものとなっているだけに、実施の説明責任を果たすためにも、「留学の効果」について語学的側面の伸長のみならず、内面的な変容についてもより深い理解がさらに必要である。内面的な変容については、留学終了後のアンケート調査等で参加者の留学の経験を評価することが多いが、ほとんどは単発的で主観的なルーティーンの事後作業の域を出ていない。本発表では、留学経験のある英語学習者の留学中の内面的な変容を調べるために、「複線径路等至性アプローチ（TEA）」を用いた質的な調査を行い、参加者の留学中の経験と変容プロセスを明らかにする一助とする。

OC5 日本語学習者のモチベーションとアイデンティティーの変容

劉(リュウ) 鑫(キン) (東京外国語大学大学院総合国際学研究所)

本研究は、日本語学習者のモチベーションを彼らの人生という長いスパンから捉え、モチベーションがどのように変化するのか、また、モチベーションと彼らのアイデンティティーとどう関連するのかを明らかにする研究である。本研究では、Dörnyei(2005)が提唱した L2 セルフシステムモデル（以下略、L2MSS モデル）を使用する。L2MSS モデルは、理想 L2 自己(Ideal L2 self)、義務 L2 自己(Ought-to L2 self)、L2 学習経験(L2 learning experience)という 3 つの要素から成り立つ理論である。その理論の由来を先行研究で遡ると、「未来志向」型の理論であることが明らかになった。本研究では、TEM 図にゼロ等至点を入れることで、L2MSS モデルに「過去自己」の概念も構築できるのではないかと考える。また、TLGM の三層モデルを基に、さらに二層を加えて、モチベーションとアイデンティティー変容を検討してみた。